

道 標

どうひょう

d o h y o

年間特集 「祈り」

第一回・祈りと願い 若松 英輔さん

連載

あなたのいのちの物語 心をいれかえ 人間への信頼を取り戻す

習わしを科学する しつける

道するべ 勝者

2018 冬季号



年間特集

「いのり」

第一回

若松英輔さん

「祈りと願い」



あるユダヤ人との対話

ある日、親しくしているユダヤ人と心を無にすることはどういうことかと話したことがあった。彼は nothing ではなく empty という言葉を用いていたから、無よりも空くうというべきなのかもしれない。

空とは、何も無いことではなく、あらゆる有を生み出し得る、不定

形な存在しじゆうの充溢じゆういつだということができるだろう。

「充溢」という言葉も見慣れないかもしれないが、存在が、溢れんばかりに充実している状態を指す。東洋ではこうした状態を「混沌」という言葉で表現することもある。万物は、混沌から生まれてくるのだが、混沌はどの存在者にも似ていない。混沌を海だと考えると分

かりやすいかもしれない。海からはさまざまな生命が誕生するが、海はどの生物にも似ていない。

東洋ではしばしば、心は海に喩えられてきた。心はじつにさまざまなものを生むからだ。同じものを見ても、その人がどう感じるかによって姿はまったく変わってくる。ある人にとって壊れそうな一冊の本は、大切な人の遺品であり、かけがえのないものだが、別の人にとっては価値のない古びたものに過ぎない。

さて、心が海だとすると、そこで行われる「祈る」とは、どのような営みのだろうか。それは、心の海からの収穫を神仏にささげることなのか。あるいは、大いなるものに海からもっと多くのものを与えてほしいと願うことなのだろうか。

先のユダヤ人は、心を空にするとは、ということを少し言葉で説明しようとして、二三三言話して、こちらを見て、微笑みながらこう

言った。

「そうだった。君はキリスト者だったね。empty はまったく難しくないよ。君が祈りのときに感じている、あの感じだよ」

彼は何気なく、あたり前のことを伝えるように語ったに過ぎない。だが、それを聞いた私の心中では、ほとんど天地が逆転するほどの大きな出来事になっていた。私はそれまで長く、心を空にするような祈りを忘れていたのだった。

無音の「コトバ」

故郷の教会で洗礼を受けたのは、私が生後四十日経ったころだった。もちろん、覚えていない。もの心がついたとき、すでに教会に通っていたし、祈りは朝晩の日課だった。

子どものころは、祈りの意味をほとんど理解せずに唱えていたが、年を重ね、意味が理解できるようになると、口では祈りの文言

心を空にして「祈る」とは

を唱えていても、心では自分の願いを強くおもい、それを神に届けるようになっていた。祈りのときが、いつの間にか「願い」でいっぱいになっていたのである。

だが、あのユダヤ人にとつての祈りはまったく違うものだった。彼は心という海から収穫したものを神に届けようとしたのでもなければ、豊漁を願ったのでもない。彼にとつて祈るとは、あるときは浜辺で、また、あるときは水面にからだを浮かべて、海の音を聞くことだった。海にもぐって聞くこともあるのだろう。

哲学者の井筒俊彦は、言語である言葉には限定されない、うごめく意味の顕われを「コトバ」と書いた。ここでの海の音が、神仏の無音のコトバであるのはいうまで



人はしばしば、神仏と取引しようとする

もない。神仏は、「言葉」によって人間に語りかけてくることもある。だが、多くの場合は、文字や声にはできない「コトバ」によって呼びかけてくるのではないだろうか。

他者の話を聞くとき、私たちがまず、なさねばならないのは黙ることである。祈りの地平でいえば、それは願いを鎮めることにはかならない。

祈りの扉が開くとき

神仏は、私たちよりも私たちに必要なものをよく知っている。神仏は人が願う以前に、私たちに何が不可欠なのかを知っている。それにもかかわらず人は、しばしば神仏と取引をしようとする。そうした態度を強く戒める言葉が『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」に記されている。

人間の心は願いに満ちているからだ。神に願う前に神の声を聞けとイエスはいのだろう。

心眼という文字はよく知られている。しかし、これに似た表現で「心耳」という言葉がある。肉体の耳ではなく、心の耳で大きいなるもののコトバを聞くとき、祈りの扉はしずかに開き始める。

若松英輔（わかまつ・えいすけ）

（イエスは）鳩を売る者たちに仰せになった、「これらの物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家にしてはならない」。弟子たちは、「あなたの家を思う熱意が、わたしを食い尽くす」と書き記されているのを思い出した。すると、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「こんなことをするからには、どんな徴を私たちに見せてくれるのか」。イエスは答えて仰せになった、「この神殿を壊してみよ、わたしは三日で建て直してみせよう。」

ここでいう神殿を建造物としての神殿だと理解することもできる。しかし、人は心のなかにも神の家である「神殿」を有している。先の一節にあった「鳩」は人が神へと贈る供物である。だが、イエスはそうしたものを神殿から運び出せという。供物を神にささげる

批評家・随筆家。東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授。1968年生まれ、慶應義塾大学文学部仏文科卒業。2007年「越知保夫とその時代 求道の文学」にて三田文学新人賞、2016年「叡知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦」にて西脇順三郎学術賞、2018年「詩集 見えない涙」にて第33回詩歌文学館賞を受賞、「小林秀雄美しい花」にて第16回角川財団学芸賞を受賞。著書に『井筒俊彦 叡知の哲学』（慶應義塾大学出版会）、「イエス伝」（中央公論新社）、「魂にふれる 大震災と、生きている死者」（トランスビュー）、「生きる哲学」（文春新書）、「霊性の哲学」（角川選書）、「悲しみの秘義」（ナナロク社）、「内村鑑三 悲しみの使徒」（岩波新書）、「常世の花 石牟礼道子」（亜紀書房）など。

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

5話目

「心をいれかえ

人間への信頼を
取り戻す」

チャールズ・デイケンズ

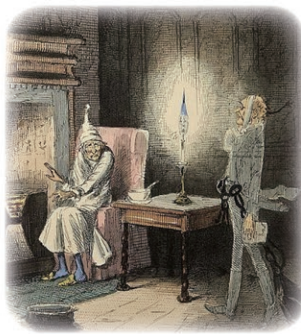
『クリスマス・キャロル』

(こだまともこ訳)

講談社青い鳥文庫、2007年)

クリスマス・イヴに起こる不思議な体験が
ケチで強欲で嫌われ者で、クリスマスが大
嫌いな男の生き方を変える。もとも有名
で、もともと幸福なクリスマスの物語。

「キャロル」は歌である。ところが主人公は歌などきらいだ。「このスクルージという男、ころんでもただでは起きない、とんでもないけちのよくばりじじいでした。……(中略)なんでも秘密にしたがり、だれともつきあわず、いつも牡蠣^{かき}みたいにひとりぼっちで、からを閉ざしているのです。」(8頁)彼の仕事は、今はいない「たったひとりの友だち」、マーレイと営んできた「スクルージ・マーレイ商会」だが、親友マーレイは七年前に死んでいる。



1843年初版発行時の彩色挿絵(ジョン・リーチ)。マーレイの幽霊が現れる。

彼がクリスマスが来ても人々とともに祝おう、楽しもうというそぶりも見せない。借金があるような連中がクリスマスを楽しむなどとんでもない。スクルージは「死にたいやつは、死なせりゃあいい。よけいな人口がへるからね。それに——悪いけどそんなこと、わた

ところがある。と、慈善をばかにしている。」(23頁)と

ところがそんなスクルージの眼前にマーレイの幽霊が現れる。重い鎖につながれ苦しそうなマーレイは自分の生涯は何か誤っていたという。そして、クリスマスの時期にこそ心をあらためなければならぬ、そのためにこれから三つの霊が現れる、それに学んで心を入れ替えるという。

午前一時になると最初の霊「過去のクリスマス」の霊が現れ、子どもの頃のスクルージのクリスマス

の光景が浮かんでくる。つらい境遇だったがやさしい子も、親切な大人もいた。希望に心が輝いたこともあった。次の夜は「現在のクリスマス」の霊。クリスマスに喜びを見出している人々の光景を見せていく。貧しい人々を助ける親切でおおらかな心の人々がかもし出す楽しい交わりの場に案内される。三番目に現れたのは「未来のクリスマス」だ。このこわい霊は、スクルージが死んだ後の世界を現していく。スクルージの死を悲しむ人はいない。だが、心を動かされた人がいないわけではなかった。スクルージに苦しめられてきた貧乏人で、スクルージの甥の親切に感謝しているのだ。

その翌朝、ちょうどクリスマス

の当日だ。スクルージは生まれ変わったって明るく楽しく親切な人になっっている。「それからというもの、スクルージは、一度も霊たちにはお目にかかりませんでした」。「そして、この世に人はあれど、スクルージほどクリスマスはほんとうの祝い方を知っている者はない、とまでいわれるようになったのです」。「神さまのおめぐみが、

わたしたちみんなのうえにありま

すように！」。

まことにわかりやすく、けちで偏屈な主人公が「心を入れかえて幸せになる」ハッピーエンドの物語だ。善意と人間の交わりへのあふれるような信頼がある。だが、その一方で暗い社会の様相、それが現実と居直って自己の世界に閉じこもる人間性も示唆される。私利追求の自由を優先させる資本主義の弊害が露わになった時代、この物語は人々にクリスマスの意味をあらためて教えてくれた。それはひとりひとりの心の入れかえの時であり、人間への信頼がよみがえる祝祭の時にもなりうる。この作品は読者の心にそんな希望の火を灯す。

島蘭進(しまぞのすすむ)

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『日本人の死生観を読む』(2012年、朝日新聞出版)、『現代宗教とスピリチュアリティ』(2012年、弘文堂)、『いのちを、つっくって、もいいですか』(2016年、NHK出版)、『宗教を物語でほどく』(2016年、NHK出版)がある。

習ならわしをを科学学

する

しつける

近ごろの若者はしつけがなくなって、いない、と愚痴るようになってきたら、自分は年をとった、と反省するのと同じにしています。どんな時代でも若者は礼儀作法の破壊者。そのよくな若者を思い通りにしつけられたら、と望むのは老人であり、その時代に力を持つ側の発想です。遠く平安の昔から、近ごろの若者は、という愚痴が貴族の残した記録の中に見えます。

しつけ、という言葉に日本では「躰」という字を作りました。いわゆる国字です。いかにも躰という字には日本人のしつけ観がよくあらわれています。つまり身体所作が美しい、というのがしつけなのです。ちよつといじわるない方をすれば、心の中までは考えず、とりあえず見た目が美しければ、良いしつけができています、と日本人は考えてきました。

しつけに漢字をあてれば「仕付け」でしょう。連想するのは仕付



け糸です。仕立てた着物が呉服屋さんから届きますと、袖口など仕付け糸が通してあります。まだ縫い目など裂地きれじがなじんでいないのを、しばし押えておくための仕付け糸です。からいよいよ着るときはこの糸を引きぬきます。

われわれ人間の行動はつい自由気侷きまづまになりがちです。そこを、外から力を加えて型になじむように押えておくのがしつけです。しかし、人前で行動するときまで押えておけません。また気侷きまづまになるかもしれないが、そうしたら、また押えておけばよいのです。何度でも押えておくうちに、それが型として自然になじんできた時、しつけは完成します。それ

を型の美と呼んできました。

儀式における型もその一つでしょう。何故そうするのか、確たる理由があるわけではなく、長年やっていくうちに、一番美しく、力強く、無駄のない型に納まってくるのは歴史が生み出したしつけです。茶の湯の点前作法てまへも同じで、何百年と同じ事を繰り返している間に、今日の型ができあがりました。しかし型に完成はありません。型は時代とともに変化します。ゆらぎます。だからこそ型は継承されると思います。

しつけは型の美で身体の美しさの追求であるといいましたが、そこで終らないのが日本の文化論です。型が整ってくると、それにふさわしい心性がそなわってきます、と日本人は考えました。これがキリスト教や儒教でしたら、まず心を整えることが先で、その心が外に表現されてきた時、礼が実現すると考えます。そこは欧米と中国

は同じで、日本人と逆の発想です。鶏が先か卵が先か、という話に似ています。

しかし東は東、西は西と、相入れない思想と考えるのは不十分。むしろ、両方のアプローチがあると考えた方がよいでしょう。型をしつけることと心性を大切にすることが同時並行的におこなわれてこそ、実があがると思います。今は、どちらかというと欧米型の道徳教育にかたよっていますが、本来のしつけの良さも、とり入れていってほしいものです。

熊倉 功夫 (くまくら いさお)

1943年東京生まれ。東京教育大学卒業、文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長などを歴任し、現在 MIHO MUSEUM (ミホミュージアム) 館長、国立民族学博物館名誉教授。2013年、中日文化賞受賞。著書に『日本料理の歴史』、『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』、『後水尾天皇』、『文化としてのマナー』、『現代語訳 南方録』、『茶の湯日和 うんちくに遊ぶ』、『日本人のこころの言葉 千利休』、『熊倉功夫 著作集 (全7巻) 等多数。専門分野は日本文化史、茶道史。

勝者

「お前！ そんなことしたら、死んでしまうぞ」。私ならそんな言葉をかけてかも知れない。ゴータマ・シッタッタ。後のゴータマ・ブツダ、釈尊の出家の際のことである。彼は二十九歳だった。

王子と生まれ、王位を保証された地位を捨てる。妻子を捨て、財力、武力、権力、自身に備わった勝れた資質、その有用性のすべてを捨てる。まさに無一物。それでも達成したい目的がある。それこそが苦からの解脱、「さとり」であった。これほど強烈な選択が考えられるだろうか。

私なら解脱を求めるだろうか。多分、苦を苦とも自覚せず、より執着しつづけているはずだ。……世にはすべてを捨て、命を捨てても実現すべきことを求める、実に幸せな人がいる。彼は六年にわたって苦行を続けた。断食に徹した彼の姿を見て、人びとは「ゴータマは死んだ」と噂した。

しかし、苦行の無意味さを痛感した彼は、施された乳粥によって体力を回復し、川辺の一樹の下に安坐した。その樹は後に菩提樹と呼ばれる。

深い瞑想の場に姿を現したのは、自身の内面に他ならなかった。最強の敵、それは自身だった。すべての苦楽は自らが創り出した幻想だった。彼は人を苦しめる「魔」の根源を見定めた。自分が自分に誑かされていた。「もう、だまされない」。

戦場にありて百万の人びとに
打ち勝たんよりは
おのれ一人に打ち勝たん者
かれこそ最上の戦勝者なり
〔ダンマパダ〕

「臘八」。十二月八日の明けの明星を見て、ゴータマは目覚めた者、勝者となった。彼は生死にありながら生死を超えた者となり、自他がありながら、自身に対しても、他者に向かつて、無礙自在なるを得た。このことを「降魔・成道」といい、この「臘八」の日を成道会と呼び習わしている。

編集後記

今年には災害の年だった。豪雨、台風、地震……。各地で被害が相次いだ。「なぜこの私ではなく、あの人が」「なぜ他の誰かではなく、この私が」。こんな問いに囚われた人も多いだろう。しかしこの問いへの答えは、少なくとも人間の領域にはない。

自分の無力さを思い知らされたとき、人は大いなるものに願ひ、祈る。だが親鸞聖人は神仏に祈願することを否定された。こちらが祈願するのはか以前から阿弥陀如来に願われていたことを、念仏の声の中に聞き開くことが肝要だと言われるのである。

しかし一方で、生きていれば時に、祈願せずにはおれない瞬間が訪れる。「いのり」とは人間にとって何なのだろうか。本号から始まる新たな年間特集では、そんなことを考えてみたい。(まこと)

平成三十一年度年忌表

一周忌	平成三十年没
三回忌	平成二十九年没
七回忌	平成二十五年没
十三回忌	平成十九年没
十七回忌	平成十五年没
二十三回忌	平成九年没
二十五回忌	平成七年没
二十七回忌	平成五年没
三十三回忌	昭和六十二年没
五十回忌	昭和四十五年没

表紙の絵 降魔成道

日本では12月8日は釈尊が覚りを得られた日として成道会が営まれる。一般にはまた12月8日は太平洋戦争突入の日であり、ジョン・レノンが殺戮された日と覚えている人もあると思う。釈尊の生国インドでは、ヴァイサカ月、つまり月暦の新年の最初の満月に誕生、成道、初転法輪、涅槃があったと伝えられている。ちなみに日本の成道会の行われる12月8日にブツダガヤに参拝したことがあるが、特別なことは何もなかった。釈尊は成道されてからも、その後、悪魔がしばしば現れる。これは心の迷いであり、生涯悩みながらの人生だったと推察される。大般涅槃の意味をよく考えてみたい。

畠中光亨(はたなか こうきょう)

日本画家／インド美術研究者
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
ホームページ <http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)